〔Bartolozzi, F ; Basire, J
Italian School of Design
London 1835〕

No. 6 Wyatt
The Industrial Arts of the Ninteenth
Century 冊2

〔Wyatt, Sir Matthew Digby (1820—1877)
The Industrial Arts of the Ninteenth Century
London 1851〕

No. 7 Holbein
Portraits of the Court of Henry VIII 冊1

No. 8 Owen Jones
the Alhambra Palace
the Grammer 冊1

No. 9 (エランテルサイテ)
出版物 帙及図11

フェノロサ・岡倉不在中の図画取調掛

妙義山地取

フェノロサ、岡倉不在中の明治二十年三月、狩野芳崖と狩野友信は岡不崩、岡倉秋水、本多天城を連れて妙義山へ写生旅行に出かけた。出発した日は、本学蔵狩野友信履歴書の明治二十年三月二十六日の項に「實地爲寫景上野國妙義山ニ出張ス」と記されていることや、また、後述の狩野芳崖筆「妙義山地取」図巻の中に「二十六日」「二十七日」などと写生の日付が書き込まれていることなどからみて二十六日であったと考えられる。帰京の日は定かでないが、数日間の旅であったらしい。

この旅行については岡不崩の回想記が二つある。

芳崖先生が圖畫取調掛に居つた時分に妙義山の寫生に行つた事がある。それは河瀬秀治君が其處の縣令をされて居て〔河瀬が群馬県令の任にあったのは明治六年——編者註〕、其管轄だから妙義山に登られて、妙義山は實に絶景だ、端西より景色が良いと云ふので芳崖さんに是非お出でなさいと言つて來た、其處で芳崖さんは文部省に願つて友信さんと二人が旅費を貰ひ、それから私と岡倉秋水、本多天城、これは自費でしたが、先生は鞄に文部省御用と昔風に札を貼つて行かれた。

(「本校創立当時回顧座談会」『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号。昭和六年四月)

〔芳崖は〕曽て妙義へ行つた時は、實景に就て批評された。(此當時滊車は上野から横川驛までしかなかつた)初日横川から人力車で坂本村を過ぎ、碓氷峠を登るときに、先生はふり返り〳〵景色の説明をされたが、車上では思ふやうに話しが出來ぬと言つて遂に車から降りて説明しながらこつ〳〵と峠を越えて輕井澤に着いた。翌日横川へ下る時も同様で、車夫は空車を引てお供である。(此行には種々な奇談が多かつた)妙義中ノ嶽の神官の處へ一泊をした時には、翌朝の日出前に山の景色を

寫生しろと命ぜられた。時は三月下旬ではあるが、残雪が處々にあり、しかも霜が雪のやうに降つて居て、寒いのに閉口したが、成程早朝の山の景色は格別であつた。毎日宿に着くと、まず其日の寫生を先生に見せる。色々の批評がある。なか〳〵有益な修學旅行であつた。予は此旅行で風景畫の研究が一歩を進めたと信ずるのである。（予は其前年碓氷を越え信州路より木曽に入り木曽川を下り大垣に出でそれより郷里越前に歸りたることあり）先生も大に得る處があられたやうだ。今米國にある懸崖飛沫絹本夕陽歸樵紙本などの圖は此旅行のをりの寫生である。（此時の寫生は美術學校にある筈だが十三四年前に岡倉覺三氏が同盟辭職の時に先生の下畫類は大抵散逸したのである）歸京してから、隨行した門人共は寫生を仕上げて先生の批評を乞ふたのだが、その時予が寫生したものゝ内に、火山岩の皴法を工風したのを見られて、これは面白い。どう云ふ風にかいたのか教へろと言はれた。予は、實は是迄狩野家のやうな皴をかくと丸みが付かないから、色々と工風して見たらどうやら丸く見えるやうですと言つたら、大喜びで、其畫法をわしに呉れ。一つ描いて見るからと言つて、描かれたのが、即ちかの福壽之圖二幅對の巖の皴法である。

（岡不崩著『しのぶ草』明治四十三年十二月。日英舎）

ところで高屋肖哲は「座談会の後に」（『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号）に、芳崖らが明治十九年十一月に妙義山の秋景図取りのために旅行したと記している。とすると芳崖らは二度妙義山へ出かけたことになるが、しかし、それは高屋の記憶違いらしい。彼はほかに岡倉覚三が帰国直後の明治二十年十一月十日頃、本多天城と岡不崩を連れて妙義山の紅葉見物に出かけたことも記しており、これと混同しているようである。因みに高屋自身はどちらの旅行にも加わっていない。

芳崖らの妙義山旅行は上記『しのぶ草』にも記されているように、修学旅行の意味をもっていたらしい。その際の写生は三巻に纏められ、本学芸術資料館に収蔵されている。標題は第一、三巻が「妙義山地取」で、第二巻は「妙義山佛界地取」となっている。孰れも主として鉛筆（一部色鉛筆使用）を用い、上毛三山や浅間山その他山脈の遠景や妙義山中の近景などを写生したもので、地名や山名、写生地点、日時、和歌なども書き込まれており、中には妙義町の白井幸次郎なる人の所蔵品（石器、曲玉、硯、古画等）の写生やメモなどもある。これらの図巻は単に芳崖筆とされているが、ほかの人の写生も多少含まれているようである。

悲母観音

日本近代絵画の名作の一つに数えられる「悲母観音」（重要文化財、本学芸術資料館蔵）は芳崖の最高傑作であり、絶筆となった作である。古くは慈母観音と呼ばれた。上述の妙義旅行から帰ると、芳崖はその下図にとり掛り、死の数日前まで小石川の事務所で制作を続けたといわれる。本学芸術資料館にはこの作品のための下図類も多く残されており、それらを見ると、芳崖が古画の観音図の図柄に基づきながらも、各種の画像、特に西洋画の天使像なども参考にして構想を練ったことが推測される。

「本校創立当初回顧座談会」（前出）に於てはこの作品が一つの話